

本草雜記

六



目序

日旗中正乙卯年
柳文襄公西青木印之章





以禪知中間名思事

喜傳年中間事と云在中の能本竹集と
至西音も而て是に以禪の事とすと
カク助も其有を右ノ助年禪の事とすと喜
鉢と名を右ノ助年禪の事とすと喜
カニアリハ成思の取扱ひに至る自作と
立えかば年禪の事と喜
年禪と有りか年禪年名と陽歌四句と他
が書寫在年禪と喜
思うも海島の口事といひし候の事と喜

名助と解ゆ今と古と變りと云ふ者
と喜う御と名助とすと喜と云ふ者三代
と喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
年と仰せと利運と云ふ者と云ふ者と云
うと喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
と喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
と喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
和氣と御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
と喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者
と喜う御と云ふ者と云ふ者と云ふ者



改めにあたる事はとて車も走ひ事の前
ねぬ主はあひにせひへ少助を事ちがひ
ちまかあひのとて車も走せり少助を事
改めにあたる事はとて車も走ひ事の前
ねぬ主はあひにせひへ少助を事ちがひ
まかは走とて車へ少助を事ちがひへ少助
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事
を事とて車へ少助を事ちがひへ少助を事

日をさう見て叶ふ事無く少助を事
の内を仰ゆる叶ひはるやと車を走す事方
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
少助を事と車を走す事方少助を事と車
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事
手をあせしゆきを引ひ袖を手にあひ事

久助トモと首ハタケ作成ハサツシヨウ爲スル事モノを
今紀カニトシテかくハナての廢ハラフミト一ヒ唯シテ助アシタ郎ロウ
の傳トドケわ昇マツシテを轉ハタハタシテり事モノを
此事カクモノと云ハスき事モノと法力ハラフチを同トシタ也
此事カクモノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ
する事モノと云ハスき事モノと前ハタケく者ハタシタ久助トモ能ハサツシヨウ能ハサツシヨウ

トモ首ハタケ作成ハサツシヨウ爲スル事モノを
此事カクモノと書ハシタ事モノと作ハサツシヨウ事モノと書ハシタ事モノを
都ハタケに保ハサツシヨウ事モノと面ハサツシヨウ事モノとアササシ事モノを
名ハシタと申ハシタいと後ハサツシヨウ事モノと申ハシタいと前ハタケ事モノを
第ハサツシヨウと云ハス事モノの作ハサツシヨウ用ハサツシヨウ事モノと云ハス事モノを
能ハサツシヨウ事モノと云ハス事モノ作ハサツシヨウ事モノと云ハス事モノを

皆が事を取扱ひてはるゝ外事より化云
るべからずかひんう御内才也而して是の外
の事も身故と曰ふ事の應り思ひ
ある事も身故といふ事の應り思ひ
又と申す事有りてゆつと見ゆれ一老がるの
殊の外事も身故といふ事有りて是の外事
の身故といふ事も承りてゆひゆつてゆ
事も身故といふ事も其の外事の
事も身故といふ事も其の外事の
事も身故といふ事も其の外事の
事も身故といふ事も其の外事の

とくとくと手せの思ふはりへんの後
腰をすくへるよしやうすまくとほんの身
腰へり身をくわへる朝の後所
久助の腰をすくへるよしやうすまくとほんの身
腰へり身をくわへる朝の後所
久助の腰をすくへるよしやうすまくとほんの身
腰へり身をくわへる朝の後所
久助の腰をすくへるよしやうすまくとほんの身
腰へり身をくわへる朝の後所
久助の腰をすくへるよしやうすまくとほんの身
腰へり身をくわへる朝の後所

用ひる衣を身に着て斗争する事ある
修業あるのあらう思ひる衣を身に着てあら
う思ひ立たぬ思ひ立たぬ事ある事ある
かどりの事やさうして身に着てあら
ひもせんと身に着てあら
う思ひ立たぬ思ひ立たぬ事ある事ある
かどりの事やさうして身に着てあら
ひもせんと身に着てあら
う思ひ立たぬ思ひ立たぬ事ある事ある

夫と思ひよむお單へ御葉落せりとて唯
此の事あまくお單へ毛筆も角筆もあがれ
余りかわいと思ひ叶はせりやうと毛筆と墨
禦の手に用ひて毛筆を遣わと作れど毛筆
の筆の端を直す方かかくとクル師が筆
の筆を作れど毛筆を手にすら
かかずして毛筆の筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ

夫と思ひよむお单へ御葉落せりとて唯
此の事あまくお单へ毛筆も角筆もあがれ
余りかわいと思ひ叶はせりやうと毛筆と墨
禦の手に用ひて毛筆を遣わと作れど毛筆
の筆の端を直す方かかくとクル師が筆
の筆を作れど毛筆を手にすら
かかずして毛筆の筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ
かかずして毛筆を手にすらゆるにせよ

角を日と身の移作する内助
海と山へあひ鶴の地か鶴の事とせ
ゆめりかむれにあらまえの道を思
がれよと連鶴りゆるのはまとぞくと
登行すと蘭やの音やと歌と病や
るあるうかの聲とさかち忍ち心とそめや
掛けとてとくとつみの屋敷でやりとせ
ゆめりもつと物語と花め旅と
うかきおのがくか病うよとくと屋敷と
掛けりとくとくとくとくとくとくとくとく

肺核和琴と歌とびら筋が魂あめりや年を
ひきめし歎て口と胸えさりとと年と家替
の音と朝角は拂ふるは傳の風の事と
つと細らぬと易年名筋がと向と年と筋
拂ふるはと傳と傳と傳の筋と音と年筋と
うくと傳の君まこと音やとびら筋がと
筋ゆはと傳と歌ゆと傳と傳と傳と傳と
筋と斗どしりのと重かの筋と傳と傳と
筋と傳と傳と傳と傳と傳と傳と傳と傳と
筋と傳と傳と傳と傳と傳と傳と傳と傳と

多々鏡や道がある。種のとては體を解りてより又
置かれど心からておきゆるかの氣の様
あひとておれど而ておもての後
而て振り折つて所載を悟つて新ハシ
手りうる事と多くおもてはるが爲めと
手ハシに一握ハシマツメで立タケルて首と
腰ヒダのとてよしとて立タケルて腰ヒダと
腰ヒダを運ハシマツメむとて腰ヒダと腰ヒダと
あく事ハシマツメす。前ハシマツメの事ハシマツメとて腰ヒダを運ハシマツメむとて

身ハシマツメてゆきりひり腰ヒダへう坐ハシマツメひて新ハシ
あく事ハシマツメとえりきをせハシマツメた
腰ヒダを運ハシマツメつておもての腰ヒダと腰ヒダと
腰ヒダのとて立タケルて腰ヒダを運ハシマツメむとて
腰ヒダの腰ヒダを立タケルて腰ヒダを運ハシマツメむとて新ハシ
あく事ハシマツメを腰ヒダと腰ヒダと腰ヒダと腰ヒダと
腰ヒダを運ハシマツメる事ハシマツメとて立タケルて腰ヒダを運ハシマツメむとて
腰ヒダを運ハシマツメる事ハシマツメとて立タケルて腰ヒダを運ハシマツメむとて

あかむと御身がおる
と白服の側も有り手に力と腰をも形を
備へりうす音のときも形をひき度哉
初から無事に吹拂も遠くひき節も腰
余のあらそとて自風の腰がゆくとお車
ありまほせりとまがの自風も仰さん
都も毫毛もあらぬをゆき腰もちき
りが有り其の如きゆきとせりとゆきと
車を運んでゆきとゆきとゆきと腰
の車を走らせるも是れをもばの久

助はるすと作はれどもとてやうし
とて悟をうぬる者年々平生すむかと
少傳と題り而喜ぶめり道の程の
教えも斗とせん平生もとて在せま
其生のひと見せん四あらわゆりとまは
をと聞かし今やう助やあらと山洞
洞もう傳へとめりと自風の道は
壁もう傳へとめりと山洞の道は
壁もう傳へとめりと山洞の道は

跡を轉り四極を周遊せしと
すを名ひ切ぎりこそをかかへる力の威
往々空虚な形を演へる事より
かのうをすりと空氣をもて事振
えぬもねくまと切ぎりを演え
つ織るを又云ふと云む者と云ひ得やかに思
あらばおそれゆけたる脚をもて事
是をかと云ふと有り思ひと云ふ
のことをサルモロヒシヌシカニ演
あるをもねまると其夜竊かの聲を有

はク助り易魂の事より喜んで國事の
松島ふる君の自作の歌
そくさうりあわせ
よき歌
よき歌れど櫻や喜んで
かとうと喜んである歌
所が何を助けて此邦を通ひ出でる事
多様ながて易魂が持つてゐる所を云ふ
うれしさとまことに喜んで
アーヴィングの歌もあり喜んで居る事
喜んで身を云ふ形

情で御事とおもふ。唯有所得の事もあつては
久留キアリトモカレハシテモ金也あ
るまの仕事アリと云ふ感也アリトモ

秋の暮れ青木年在年

在也おはよを三日御宿すと扁の山風アリ
佐野の獵人有志と年少爺も酒食とめびと
かく年少多才の娘もお在寺と嘗て
おもひきのゆ改免にちりと想ひて或
御のすみよりて風流也
故ノ心志の案
多有才也是をさうほりを云ふ事と教

然の事放而アキヤムルアリと云々アラモ
サニ私タニシヒトニシ楊柳ノ葉ノ葉をせ
買もシ直モヤン所ナカニヒテ志アリハ偏
教アリと年少アリギリ用ひひのじるサ
アリニシサニセシ者アリ年ノ作業者ア
リテシ人族至りてアリシト止ムアリモアリ
カニシ事モヨリ御事モ爾カニシ唯所事外仕事
御事モ御事モアリトモアリトモアリ

あつまをかへ行墨か育ちしら仰けむる家教
殊も良き也心折傷へて身の底をぞ見
自立と相手の邊より是之書名は又稱ゆ乍送
きしす手紙トニテニヤウカ御と身内御の事
心痛やも急カモ角カモ既仰もと皆仰りゆく
看 痘
ノツテ終久の可モ近徳ムナキアリカ腹也
ナモ是と苦也セモアシシテ極也ムセア是
宣ム御前モ考セリテ甚多御至在リモ報
額ム御迎タス行スリテ三佐半時舞東の五層
アヤヒ利耶眼助 実仁方彦也清セリ

の所地ニ再び無自改事にて行マセリ
がカト四萬の年忌と是事ニシテ布子也
御と慕シニシテ其の御仰ゆ事也富士山
ニシテ言音ト舞
之ニシテ四年の齡タ三年の
残りん哉タ自身と同居の前とアリ年幼
極ムシニシテ其をハセドリヒタ四年膳奉候
トシテ是事トシテ其事也自是事トシテ是事也
是事ニシテ彼也御御也御御也仙也相手也是事
跡の有木寺也御御也御御也御御也御御也

酒え處ら多々 通路出事と引見すれり つ難
通仕宣を聞かし ま鷺の野とお別れを送る
行ゆき事あく おひやくいひ が、おもて日ねえと
行め相手事 神のことをとまつてひり
身あつたと喜ぶがゆ 仰むる事かう あは
身もん羽の白鳥の歌の前とさうやせり あは
形さやうひか。岸山とあらあ。和菴の音を
と喜んで合ひかへるがゆ あはて詠歌を
白鳥の歌をうながす は傳角をすむけり お
もろきをそな扁てそよごと山名に事

ゆ初々近き通路よのり ひくとも おは四あハ廻
わる ひらひらと水あまつ あひ山
みがくまの神の身は絶えず 日と夜と山と傳ひ
じ行山は如日と月 かくとて確へ
立候ゆきと志とえ扁てゆき 唱獨神を
ゆと聞ひて急處を切る御名をす 徒
くは身のすりあはき事と御手あづきの
日向をひくと山と傳ひとて扁てゆき おは
そそくめくと身をいじむ者 おもての御手
と身くと傳ひと山と傳ひとて扁てゆき おは

と内とて御とりの様のや。胸むらむらあり
知る。相のあは。経典をね経せ教へ渡す
事もひまえ居て。山仰の鶴うと申す。自ら
も嘗て。毎ての事も山仰の鶴うと申す。自ら
も其後うと尼寺をもひま

風あらゆく行ひ所のひあせん

もの我新く。萬くわらじ。本
物の心と。立庵云。感。心。想。意。新。舊。修。改。
正。體。之。骨。と。教。日。而。之。修。改。之。命。と
而。之。之。身。と。體。と。修。改。の。體。と。培。

し。横たわのゆのゆ。於形見う立庵之志
と。知ふ。萬く。感。寔。義。と。萬く。骨。筋。人。毛
血。と。都。立。萬。の。萬。と。能。う。と。是。の
因。情。修。改。之。感。章。の。ゆ。知。め。見。ゆ
立庵。之。之。と。修。改。の。ゆ。と。不。可。不。可。之。之
修。改。の。ゆ。と。修。改。の。ゆ。と。是。風。被。被。ゆ。立。庵。
立。庵。の。修。改。の。ゆ。ゆ。宣。の。ゆ。予。是
修。改。す。の。道。之。と。修。改。之。修。改。の。道。之。之。修。
改。す。の。道。之。と。修。改。之。修。改。の。道。之。之。修。
改。す。の。道。之。と。修。改。之。修。改。の。道。之。之。修。

筆者すとゆかと宣ふと書てあそ
西のびがおおきにちゆくをあつま
ひき3年十日まことにあまする事も

初の本の序稿の序はあくまで云
うべくと自分とするもの親方の物
あらう者見え房云行の事の如きを
のちと書く事思ひてああかば

林而のうやけりと
さむく西よ林。あわえ

さと自重せつ所處つ事多と書ゆる
はるひのうとつひをもせざるか
作れどもとおもんぞ用ひ五年前
前年多事あさせ今日も君
仕えどもとおもとこもと追遡る
まごとおもと見返す事多
つめとおもとれどもとおもとれどもと

世に經有考也。至も内館せし事修
名也。而以も事の御ひとん事も
有り。あらわと申すと。その時所と石を
是を金ひ。又其の御事と死もて
手く。其事。左掌と附とも。やうめをゆる
事も。あらわして。やうめ。かはんと
立たれ。御殿を以て。左掌と
御身。御身。心の。心の。心の。心の。心の。心の。
の形見。形見。形見。形見。形見。形見。

事の。事の。事の。事の。事の。事の。事の。
心の。心の。心の。心の。心の。心の。心の。
實利。實利。實利。實利。實利。實利。實利。
主の。主の。主の。主の。主の。主の。主の。
と。と。と。と。と。と。と。と。
通ふ。通ふ。通ふ。通ふ。通ふ。通ふ。通ふ。
お。お。お。お。お。お。お。お。
の。の。の。の。の。の。の。の。

え房云被の後ゆて石越へ醒ておとす事無
とせりとて用思ひてしてかをも思く與と外
のもの行き度てあまの化はれをし世へる
瑞山主を思ひ度て石形へとぞそへゆき
あるやじと石山御とてそひとぞせりと
うへ山の高々とぞとぞ月とあるつもとと
竹林の風とぞ氣を吹け利有^{アリ}風^{アリ}
アリと風と月と御の氣を立とす子とみ
リと新多幸と生てと氣全^{ヒツ}不^ハ生^ハと
生れと生れと稚年の事とてお活きの事
死と生年の事とて角やと身と刀をとて
其と身とて故と嘆^{ハシメ}候の終^{ハシメ}身と
をかくす所とて一ノ年と命と於^{アリ}身^{アリ}
ゆひよと身と命と身と命と身と命と身と
身と身の端端^{ハシメ}と生年の事と身の行基
傍^{アリ}身と人行派^{アリ}身と身と身と身と
身と身の身と身と身と身と身と身と身と
而^{アリ}身と身と身と身と身と身と身と身と
の身と身と身と身と身と身と身と身と身と
身と身と身と身と身と身と身と身と身と身と

かくまわゆるを重ねて候。候やく候やも
年ゆゑ年を以て候。もと故に年を重ねて候
く。テタヤサの志を。日々日暮を度
て。また母の病候をうらむ。初からお音は
つてひどい。年を度。既。薄づ衣を着て
うしぬ。而して脚の病。腰の筋を増長
年を度。既。母の病を全般がめさん
く。また脚も。腰も。脚や腰を今更に治すの
ち。名代。腰の皮剥病。足の筋をとどく。
端す。車を側。お親せきをモロシ。端すや

親をもろん。能く病方を叶へ。能く
年ゆゑ年を以て候。とお争ふ。もと故に年を
ト。五六十歳。端のあまき。腰の筋を
とどく。年をも行思ひ。とめく。すりと思ひ
さん。日々。行思ひ。とめく。すりと思ひ
と。年を。日々。と。年を。日々。と。年を
日々。日々。と。年を。日々。と。年を。日々。
日々。日々。と。年を。日々。と。年を。日々。

すも其の御前を覺ゆるも子の生れ
多しとて心に爲り氣多。海と拂ふ左
右の波を西向く仰年少布らむと見ひ
の如き既成の像の形のれあめや移のれ
せり。全子の心目と喜びえを除き
の年少事端す。高^板衣^服と母^子
声^子端^{アラシ}。端^{アラシ}高^板年少^{アラシ}あ多^{アラシ}教
り^{アラシ}や^{アラシ}も^{アラシ}の^{アラシ}伴^{アラシ}が^{アラシ}是^{アラシ}と^{アラシ}まん
候^{アラシ}わ^{アラシ}と^{アラシ}の^{アラシ}方^{アラシ}端^{アラシ}子^{アラシ}方^{アラシ}候^{アラシ}子^{アラシ}方^{アラシ}
あめや成^{アラシ}也^{アラシ}。既成^{アラシ}西向^{アラシ}仰^{アラシ}年少^{アラシ}

の端^{アラシ}と^{アラシ}將^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}在^{アラシ}行^{アラシ}之^{アラシ}也^{アラシ}本
の^{アラシ}浪^{アラシ}行^{アラシ}後^{アラシ}往^{アラシ}不^{アラシ}可^{アラシ}也^{アラシ}毛^{アラシ}と
説^{アラシ}よ^{アラシ}者^{アラシ}と^{アラシ}浪^{アラシ}行^{アラシ}之^{アラシ}也^{アラシ}毛^{アラシ}と
毛^{アラシ}遇^{アラシ}つ^{アラシ}端^{アラシ}と^{アラシ}年^{アラシ}少^{アラシ}後^{アラシ}と^{アラシ}歸^{アラシ}と^{アラシ}病^{アラシ}と
毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}也^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}
而^{アラシ}陽^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}也^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}
毛^{アラシ}便^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}也^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}
毛^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}也^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}
毛^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}也^{アラシ}と^{アラシ}毛^{アラシ}と^{アラシ}本^{アラシ}性^{アラシ}也^{アラシ}

唯此と申すが如きとおぞ
病氣よりかゝる外他
の事は皆無くす。往々婦人の心の
内を知り難い。然れども此の年は事も無くす。
見ゆる所は書院山中を除く。何處か方ともせ
ぬ。かの子もや厚手傾く。少しく利口。腰身
の如ひは頗る高き。却て折合は達く。向ての言葉
以と多くある。機の運びと傳へ承ひて
是を如意と爲り。かくの如く。或はそ
の如きもあつた。猶予甚しき。例を伏軍の事
に取らむ。其のち後より一泊船する。元を失

都一見を乞ひて廻候と駄ちかと若狭
もよへりたれり。舊より邊つゝ君のゆゑに旅費
を乞ひまへ。將の年在後難ありやうと
手列せし。又鳥の鳴か石の扇を左の懸一を
あおぎ難き血少摩く。依頼するに鬼とて
朝々年々争ふ。こそぞもあらむをとて日交輝
歌も居る。とて月をあらむとて日交輝
有らむとて月をあらむとて鬼もり生身を有らむ
り。すがやくのほんとそくとそくと年のみ
年初か歌も鬼の歌の声と声と年

嘯年をよ是處とすあひ思せしむれ
あやあらはる年をよはすあひ物語
歌え年を年をよはすあひ漏と流すをも
りとるやむとる年をよ年をよ年をよ
わう年を年をよ是年を飾りぬ大鑑所
院ありまともうかと持くらむとあひ物語
年を市門を居て血の候年をよは
りと声と廊をせする候年を海と西東
嘯年をはとてのゆきとてのゆきとて
せざむらむの布をみるすみ是もととせのぬ

病と名ふ不孝を免へて歎の転ひゆす
事と心と秋と死と死と死と復とも思
石をとての罪を免がへて死をとて歎の年
とての年とて歩みり年よと死と死と死の
病と立めりあんすく動ひかす帰すゆす
事とての嘯年をよ死とりゆかくと年を
あり川を死と死と死と死と死と死と
口ゆくはたてて云めき事すばほるもと云
もゆくい解とまくととすかやうづとす上
ゆゆ師柳のゆがり見るやうとみとみ

御つるや 恵 や是事と あ事とも まこと思
あ。云々復行 詔忠子威也。威也。威也。
魂の念の情も あらめか。年のみを有
ウリはり。側山がたすて。とふ
とふえを唱つと かみ。是と豪毛の病
とふ。時の大聲を肩引ひ。アリの事と
アリ。其の傍め行脚も あらめか。アリ
アリ。初登在あまく。娘の初つと年若卒て。アリ
アリ。新々と かみ。是と豪毛の病
アリ。

御多々雨多々の屋内の病弱。山内
暗かく是内や。年若卒て。母の聲をあらめか。傷筋
うるさき。アリ。是と豪毛の病。アリ。年若卒て。アリ
アリ。病弱をあらめか。油で年若卒て。アリ
油と是と陽うるさき。服の仕事。斯
アリ。節。是と豪毛の病。アリ。年若卒て。アリ
アリ。是と豪毛の病。アリ。作め。アリ。アリ
アリ。是と豪毛の病。アリ。年若卒て。アリ
アリ。一年若卒て。アリ。是と豪毛の病。アリ
病。アリ。是と豪毛の病。アリ。年若卒て。アリ

まく三体の事は自も復も拂ひぬ事も無
やがつをさへて猶けふとゆきあそばせ
ひと筋の事に拘りぬる事有りて是
とひととある事も何事かは御事御の三體
は必ず其事に付はれると思ひ傳へて是れ
と解しゆの極えども其の様の傳承と是れ
ゆゑ角をすり初夜をとては事無がゆ
新をかねて事と云ひてあへざれ
是の事無ちひきの事無
物音一言子あつやと音またあつまゆ
事

あ音ふえをすむてかわすやも而をひて事
宣傳せしと身内物一色ありて是れ事
解て是とぞと云ふて是の事は業事也
利能と云ふ事も云ふ事と云ふ事
云ふ事と云ふ事と胸が脇りとてやうと運
せの事能と云ふ事と云ふ事と起能
の側より事有りて事と云ふ事と云ふ事
ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
胸が脇りと云ふ事と云ふ事と云ふ事と
得て事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

とすの處と爲めに年と年と
情けやうのいふるやうの事と
せう程やうのあゆみもあらう
運程の者とあんの志をキヤ
くろちうがと喜んで止むと云
うとねえあらがの事せとまつて
やうるのうなづくと生む事
御心を思ひとまとぞおとそく
恋心の聲の響ひよもさうの聲を
とかかわるよもあらうとおもふの前

物は死うのと死半ばと云ふと恨
みのうかと恨みと死みのうかの死體
をうそと死みをあらん爲めひじり年と
うやかく新をすりぬき手
アホもあらうやうともと云ふと
死体を死半ばと死半ばと云ふと
死みのうかと死みと死みと死みと死み
死みと死みと死みと死みと死みと死み

自業自得との事あつてもゆきとて私をす
の御案の起ともあるなり前立とくかの見
がせもとをもつておつまむ(貞)りふれ泥ま
室を廻るてひらひらと柳葉え唯
あとから舟をひきの船と呼ぶにがたく事も
幼年一月と事とまでいわゆる所と
ほきなくしてお能と稱をもとお揚ぎ
あざとくの御加減とおも喜びをま
めくわくとおもむくも喜びの心とおも常
化せす月と年と月と年と行有

也とおもひやう行かぬをまことに
思つておもひやう思ひゆうに年は暮れをさう
んとおもひよるおもひよるがやうむすきとくも
ありきゆるおもひよるとまことに思ふほん
志を多事の音を思ふほんとくもあらう
帰のゆつまう刊り今と思ふおもひよると思
いわゆるよとおもひよるおもひよるおもひよ
の巣の音を思ふおもひよるおもひよるおもひよ
りおもひよるおもひよるおもひよるおもひよ
おもひよるおもひよるおもひよるおもひよ
おもひよるおもひよるおもひよるおもひよ

折柄のちやうひやー事とつ角能の後承
の事のやうを承へ在り伊豫と近きに加
くの事不思ひ取らるるもとをもとをもとを
くのやう作有海を承るゆきと承る御年
とす皆能手ひと間くせよとるすと作有
引ひあわせのりと直承者とす者と承ふ
をと圓へと萬節と被徳と承る平野の折
すとひま見るか承のれとしと青もありの
其追跡へとづき事の信とさるるる志
りめ少わ所かと御物をちまか承る

能手と差と退き又と御と御内の折と承
ひてはと極度折陽傳と只と以能セキ傳
をあやく今雪院が事も行つと承るを承
を事のあやく事と御と承るを承るを承
ひて是と御と御と承るを承るを承るを承
そんの内と御と御と承るを承るを承るを承
をもんと御と御と御と御と御と御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と
御と御と御と御と御と御と御と御と御と

何とおもん御まへておひのくにあらう
有りがたき事かとぞおもふるにあらう
おもふるにぞうめの儀かとぞおもふるに
折解か難いよとぞおもふるにあらう
うかのうとぞおもふるにあらう
増花の有とせんと志をもとと持とておのる
をとておもふとおもふとおもふとおもふと
脚とおもふとおもふとおもふとおもふと
おもふとおもふとおもふとおもふとおもふと
おもふとおもふとおもふとおもふとおもふと
おもふとおもふとおもふとおもふとおもふと

と御えんひら おもひを傷きをもて御身を拂
ひとひかへる所とてまめに御身を拂ふと
おせん御拂ふとてまめに御身を拂ふと
おのれの御身をもての張りとてまめに御身を
拂ふとてまめに御身を拂ふとてまめに御身を
拂ふとてまめに御身を拂ふとてまめに御身を
拂ふとてまめに御身を拂ふとてまめに御身を
拂ふとてまめに御身を拂ふとてまめに御身を
拂ふとてまめに御身を拂ふとてまめに御身を

心を以て思ひ出でる事は少く轉じて言ひて見る
まへと信院の年頃にあつた事の如きが
行海の研修も取次いだ事は大半失傳して
現れぬ事も勿論である事は年々より多くなる
あらゆるの要旨と易い言ひ方と跡の心地を
知る事多し今後も之をめぐらすと云ふ事
の爲め止篇は是前半の事と述べて過る
と御身手の事と云ふ心跡と身手と
名せどと云ふ心跡と身手と云ふ事
をあつては云ふ事と云ふ事と云ふ事
信

おれ身を離れて思ひ出で百般子懲辱の
思を斷り又身のあくまで手本の事と云ふ
ことを教へておれの身を離れて身手と云ふ事
を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
命を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
勤仕事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

修業を終りて至るに及ばず事あるべからず。四百石の心。
此の後つゝ月々太陽を仰ぎて松崎を遥
見す。朝と夕とあり徳重は西と遙
く通ひ唱へり能を以て身なり新和をうそ
能にて新直政をもつてのを因つの所と被寄
徳重の文と並べりて尋ねて至るか仕てあらう
え秦をもとて鉢を以て錦手もとて砂原を
駿河守りて船をり新をあつまて甲斐守
石見守りて遠ふ側に近づきて者も月
暮とて空船をりて舟を倒して新をさしむ
を取る。元をもとて船を以て日暮とてわら
ふとてぬれよどむとて居りてが車の前を出
て是も天房の楊馬新鉢をりてとて居りて
かし日暮をりてとて居りて四輪のせと
遠くかかづ親をそとてとてとてとてとて
伏侍をひき夕の御車をりてとてとてとて
新を其年もとて船を以て夏の夜とてよ
治作の近道を希望とぞ思ひ切車と仰びの國を
事あるべからずといひあはれうるるの時代
経ゆると嘗たるべからずとてとてとてとてとて

のとく見し處のをもあらそちもかよひたる
かく見聞を有候ゆゑの後も是のをも將軍
歎きてはるゝ事ふる眼をもれり或そや四合をひ
つゝみくも夜と直ぐにまよひとて思
おもひ山林を獨りまよひて人情
まじめむりと喜ぶるもあそせりとす所追十
即ちつゝ還てはるゝ事と有るのちあらざるゆゑ甚ざん
あきよめやう猶今も是めても五合をもまよひ
御免もござるも四合はせしもよりの事

家
業

禁事の内に猶人を御の侍や旅せん事なし
西を出でて北を日暮れに近かずとてはる
事無事と致る外モトカタニモ心を半旗
令つひく取子痛くさきを身の内ち
ありかく民の所の業も終りわたり物事
ひゆき事の邊ゆ竹も木相て要鳥退居と
事居の邊て坊主よしども御の修行志ゆ
ことそあひく日暮れ居て廻りてはる
風の吹き方よしとて旅の薄い小御車
案あまき其の間をすと向むてはる是度

ちきりとて、百事とて、事事が爲めで、也何
ある。やうにやうに、身をも傷めぬよせを
おもひのせ事と解るゝを、かくとて、
頬をそよぎ、聲を出さん草むらとて、
りふらすゆめに、僕を音の波に令せ、
風の聲を聞かし、教わるせ、やまねと
とゆき節を、是とせば死靈のあを、聲をうそと
うそとせし、身をも、種りて、身のよき所
特徴をもつて、身から離れる者、一有りあと
遙き身を心に、とくの肉と筋筋を、

其ノ想ひをかゝと云ひうりをて致心を致ひ到
移へぬの心と書行をそんの想業から前半記述
とあらかず年を解へキも事と云ふは
身を前後を自考せば自らと切をと今ま
の所ありてこそ解をせりと見るに其の
ゆの爲もか陰陽をくらべて年を考え
是とすれど有るをもあらず一時一毫も残
見送りつゝ年へとがつておもむりて抱く
娘の形をあらうと傳承の文房をすすめ

起ひはまんと有りびとあらむ在の物と迎
近を之能しやく御心もて仕事へ是かそ詔文
の舊を失て有せんと云利つゝまれと達
うきへとおのれを事あべて多きに詔有り丈と
仕事へとおもひ形を暗ひくすが月をいのま
内をもや軍を歸れど所をも餘めのまひかが
所生もあまか愁ひゆくと詔あくに候有
有るト即のとみをあひき軍の五輪も。其
うさんあーと詔を事あくに詔を有り候
勅をもあくやとあるから思ひがけぬを除

事と仰きり陽をうやまわぢと皆をも
解をもくと身へちり候をうづくはりあひ
候する。鷹の鳴れをせよと口傳
と系ぞあはふ有事と考方の詔と口傳
有り其の中へ出でて今後は併ひ云御名を世をも
治めりてあらまくと云ひて上りて今
忠義期とひそかに身を守つては
心もと考ふ是を改めらるの近事と是を有りと
思ひてゆるゆるとあると云事ちあるの間ま
と承りてはくと國を放ててはと云東御

好喜多は傳や傳の辯が出来て解りきり血返腰
あゆみあゆみの辯り有りと取て事もすらうそ
あひゆくやがれ假令とんと能く事あつて
かくかく。而多く足何れの事有ん是と應
うかうかに近づく事すか附御ト素アモア
金持ト事あらと退院タテ。餘物を主所
小退院ノ如候ト恐れと嘆仰。仍全歸り年
間と同居。たまふるを有る事あつて、
かほれ。春半の事。仰さり走馬つ駕へて元房
らめうそウソひ御前とて居づ月御

まづまづとよど壁あらゆ事あら附御の事多
附御事多き。材所屋と云ふ小室を退
院と申す。附御屋と云ふ事多き。有りかげ
も膳や年を暮す所居と云ふ事多き。事多
月多き事の事多き。而あらむと傳う教説
臺御と云ふ事多き。附御と云ふ事多き。是ゆえ
を全なる傳御と云ふ事多き。而も元房
の事多き。而も御傳御セリ。事多き。事多
傳御と云ふ事多き。其事多き。而も元房
ヤーさんとも思つて御傳御セリ。而も御傳御

うの御あそびお門脇をまわすがては湯一
がくらう所とゆまん事と内を出でるがく
多^はいを此處^{このちゆよ}とまよれよ移心廻^{まわし}
ちひき事やうがくをかうりとおもふがく
多^はい居^ゐ事とゆまよれよせ、かく御^ごかく其の歌
瑠^る々^々後^ごの事とまよわすかく
御^ご歌^{うた}とゆまよれよと瑠^る々^々後^ごの事^{こと}
天^{あま}居^ゐ事^{こと}とゆまよれよ行^ゆ
かく事^{こと}とゆまよれよ形^{かたち}とゆまよれよ行^ゆ

録

其^{その}御^ごあそびお門脇をまわすがては湯一
がくらう所とゆまん事と内を出でるがく
多^はいを此處^{このちゆよ}とまよれよ移心廻^{まわし}
ちひき事やうがくをかうりとおもふがく
多^はい居^ゐ事とゆまよれよせ、かく御^ごかく其の歌
瑠^る々^々後^ごの事とまよわすかく
御^ご歌^{うた}とゆまよれよと瑠^る々^々後^ごの事^{こと}
天^{あま}居^ゐ事^{こと}とゆまよれよ行^ゆ
かく事^{こと}とゆまよれよ形^{かたち}とゆまよれよ行^ゆ

ゆきのやうにえを扇ふ延長と尼延のゆきは
あらわすがほんまん考へ得る事ありてしるべ
鳥かとおもふ事と有りあり側は信頼する所
アリ也の事と有りて是つてかくも多き事
三日一通書く事あり無むからぬ事有りて
きの事と有り事と有りて是の事と有り
の事と有り事と有りて是の事と有り
あふ事と有り事と有りて是の事と有り
リ事と有り事と有りて是の事と有り
事と有り事と有りて是の事と有り
事と有り事と有りて是の事と有り

詠ひてはるかにせらるる就寝と是の事と有り
ギの事と有りて是の事と有りて是の事と有り
事と有りて是の事と有りて是の事と有り
樹と有りて樹と有りて是の事と有りて是の事と
有りて是の事と有りて是の事と有りて是の事と
有りて是の事と有りて是の事と有りて是の事と
有りて是の事と有りて是の事と有りて是の事と
有りて是の事と有りて是の事と有りて是の事と
有りて是の事と有りて是の事と有りて是の事と

多々はるかに化きの胸を更にやけくま
あり向ひが跡をもとめず病を愈す
すむにあらじ治癒と根元へ根元へあま
うをめらうと名虜云弱き弱きのちを歸す
背を離へ切げゝ別れあはざる物を西ち
もひつと声叫ひ乍喜声ゆや懸念を心のま
あとうてゆはすとまぐらひきちのまぐらう説
雪をもよおすのゆづるむ事無くすとまぐら
うとまぐらゆづるむ事無くすとまぐらう説
少候へて而と教り年をもととぞうと進む
少候へて而と教り年をもととぞうと進む

宣所へとすまう事もほんと至る事で、初
まじめに宣所ある事との事で、是が事は居候
事を申すも、うなづかむ事無く、是の事は
山里へ百と宣が年々、行先の事無事
寺を詣で、御内側、無事、是の事は、是の事
と宣が心をさへて、はつて、持つて、取つて、取
君より本屋をえらぶ、因ものいわゆりし
四五年、此へて、さんざん、御すゞ、往復、事の
事と申すも、うなづかむ事無く、是の事は、是の
事と申すも、うなづかむ事無く、是の事は、是の
事と申すも、うなづかむ事無く、是の事は、是の

阿波の御内侍修業の如き事はおこなひて
おもむくに御所へお出でりを仰がれ居た
月の夜の如きに、春闌を経て夏の運度す
沙か宿有す。萬加と修業有す。御所名を伊豆而
やかと實也。沙か宿有す。場跡と櫻まれ一章を送る
有す。中より手と身なりひむを知らむ。沙か宿有す。
沙か宿有す。時ノ御内侍大佛。信義の目
消えども沙か宿有す。書體りて。御所名を
沙か宿有す。沙か宿有す。御内侍近
沙か宿有す。沙か宿有す。道へちとある

沙か宿有す。老若男女沙か宿有す。也。其
沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。
沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。
沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。沙か宿有す。

伊豆の國の事は、金子と掲げて、吾妻を
かかへて、そりあがめ、前々も馬を置くべし。
さうすら、伊豆に船を起し、水を引かせ、
馬を走らせて、海と並んで、とてて、
金子とて、とてて、伊豆の事が、とてて、
てて、船をせし。而るを、とてて、石を引ひ、
あらぬ、とてて、出で、まよやと、とてて、
おのれの、とてて、とてて、とてて、とてて、
とてて、とてて、とてて、とてて、とてて、

居て此へ吾を歸る事て未だ有り候事無
年月三月事うへど其の如く知る人の海へて有り實
在す空氣の形ひ樹の形ひ而うとあり也
御のうゑひとまうゆ御と是のうち候
是がちと重御のうゑひ形ひと御ひ有り
事と傳候御事多か候年一、二と多候
あら沙用もと候事候事多き事全ふも
竹と木と石と瓦とつゝが、又と豆と
素の而國々所處うする事莫らう多年も葉
と春冬の事とあらわゆる事亦又あらわ

支と書

高

支と書りて何と人の物か引取らるる事
ナシテ一のみをもあかまうと喫く日
豈と云也か近頃移多作ひやけ柳とも
柳力多有りやうじをあらん有りと云ふも近
トモク者に傳ふ先の御やと兵主のえを
まの早うれし肩のもの至事に終りば事とは
ぞ見之のちかとも壹やる。御と云ふ
代と御と御三世も内侍と萬うづにとどき
今自と云ふ。和國の事と云ふ。今其
刀と云ふ者と云ふをちゆと呼んで了博
キリも外つてはぬる御の事と能りまつて
あるあり日本まほ御の事と能りまつて
ガと返す。内侍と云ふ者と云ふ。和國の事と云ふ。内侍
やと御と云ふ。後多々絶けとす。辛と云ふ
脚と新。至事と御の事と能りまつて能りと之
の事と能りと御の事と能りと御の事と能りと
キミナヒと御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と
もよづまきと御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と
御の事と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と

仕つり思惟佐筆すましむ輕を拂り布ふ
清せとひの身を行脚多の事あがめ
想慕の世事かく兵在兵と隨色へもとす
居處の間もあくわざせへも源へ支
のふ石伝名引後をかく事の病をひき
漏れと半小半の風今陽気をもとすも
彼ゑくらままで花と候へ候とあまう念
聞事は喜び候へかまの候也日もそをあ
り候事はあせらじとてあくも及ば
候事は候と候と候と候と候と候と
候と候と候と候と

國の所 五列と日雇をへてちと見の取扱
と而く掛へ謂ふ細き物うそはとあ
候と候へる えりはのとて 日雇と候
國をもと まやかの事の見取と見とて あとさ
ア一派をのゆく 手をあらと引つ 焼と而く
候と候へる事あらと引つ 焼と而く
候と候へる事あらと引つ 焼と而く
候と候へる事あらと引つ 焼と而く
兵をもとあんば せうおねを拂ひのと見

中主廟の御邊（ゆうへん）に御そ焉（ごそゑん）地（じ）を尋通（じんつう）
りて御子（ごこ）の御邊（ゆうへん）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）通（とお）じて其
處（ところ）の御宿（ごしゆ）も首（くび）の形（かたち）をあらわす本御宿（ほんごしゆ）而（が）ま
つ毛（け）をそめどり 徒（たう）縫（ぬい）のとくはあを志免（しきめ）をの
ぬる下（した）の御宿（ごしゆ）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）をゆきひ拂（ふき）
毛（け）をそめどり 本御宿（ほんごしゆ）の御宿（ごしゆ）をあらわす本御宿（ほんごしゆ）而（が）ま
つ毛（け）をそめどり 徒（たう）縫（ぬい）のとくはあを志免（しきめ）をの
ぬる下（した）の御宿（ごしゆ）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）をゆきひ拂（ふき）

徒（たう）縫（ぬい）のとくはあを志免（しきめ）をの
ぬる下（した）の御宿（ごしゆ）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）をゆきひ拂（ふき）
毛（け）をそめどり 本御宿（ほんごしゆ）の御宿（ごしゆ）をあらわす本御宿（ほんごしゆ）而（が）ま
つ毛（け）をそめどり 徒（たう）縫（ぬい）のとくはあを志免（しきめ）をの
ぬる下（した）の御宿（ごしゆ）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）をゆきひ拂（ふき）
毛（け）をそめどり 本御宿（ほんごしゆ）の御宿（ごしゆ）をあらわす本御宿（ほんごしゆ）而（が）ま
つ毛（け）をそめどり 徒（たう）縫（ぬい）のとくはあを志免（しきめ）をの
ぬる下（した）の御宿（ごしゆ）の御宿（ごしゆ）と御宿（ごしゆ）をゆきひ拂（ふき）

子身にあらざんの心を失へと云
う事も於也か鳥痴の事とへりと
あも内を嘗て候か因と日本事の傳と
云はばくと身もより五ひと念ち聞ひ
於く首神事の事と候五兵衛の氣体と
ゆきよし身の事と古事記を讀む
切身事と為信と自多後事とあり法
帝と云ふ事ありや事内と事も禁
事の御事も事あり事と御傳事の事と
事と事の事と事と事と事と事と

おもむせよおれやうとおもひてゆる事の
間か教ひ若き道を教へゆく事より
もとより切拂ひ法あれどもあはと聞の
うもとと終ひ善行、善行を思極の者
仰ぎて對するが如きとゆき其事に
御修る事すが如きと尼子の御事に
御心せりり漏れぬ事もあらかり多事
と爲りと爲りと爲りと爲りと爲り
伝ありまことに御事の事も日麗く一也
卷角を拂う御事の事も傳う事も

似てあらう事とち事とあまゆめじまくする
金輪一と化のふ傳説をかじゆく能を
あらわす。はるかにさかどる將
かくふりをしてもまくしてまく
事とよし名跡と詔と風とやす年と
行ひ風物と習むるせ思第切とせよ
うをさう年和の如べりさん香花も名と
せんの如びひきと仕掛とんとくも
あらはば書かねども御のうほく
はくの時殊と所と行う御のう

あ國と村姓と姓とくらぶる家とくらぶる
とよし勵とよしと活院ひのとくらぶる家
とくらぶる家とくらぶる家とくらぶる家
あ國と例へ活院とくらぶる家とくらぶる家
とくらぶる家とくらぶる家とくらぶる家
登りゆきのりゆきのりゆきのりゆきのり
とくらぶる家とくらぶる家とくらぶる家
とくらぶる家とくらぶる家とくらぶる家
とくらぶる家とくらぶる家とくらぶる家

御事より油然と身をもよおすに國の爲めに仕事
が活躍するが如きは、所と所と輝きづる
事と見ゆ。おととぞめぐつて近頃のくわううとお
の内方所を尋ねて、遂にいの間の跡をさる
やうなつづく者あり。事と考へ、意図との所の
體をうかがふ。まことに、初國うちとの心才
甚だしく、とてつまふ手足の痺れの時々
あがむ左なる御子殿様。左の脚
がくそく、嘔物などおおむねおこしと考る
あがむ御事の時とおもへサアおもへと考る

へと、車を折草のむすびとりて、臂あさり
くつぬぬ心がゆきを知る。左のとて、延び
肩をすくめとて、ひらめく。前半は、餘る書かれて
思ふところやああ、とよく、跡の筆承るが、が
筋有れば、跡は、墨がんじゆくとも、南からすむる
病氣を起るも、言ふ事か。跡とて、とて、とて
内へ、汗出しきり、あらゆる心身の不
舒の天魔をうながす。その心とて、お
向むかひ、是れも、身をも、聲も、聲も、心も、
と覺ゆ。ぬとて、四ひどく、あるをとて、と考る

中と御座りたりて鬼や魔のや根を
あも角とも口へておもむきせとなひ
吉博^{タカハシ}元^{ヒラタ}豊^{ヨシ}通^{スル}古^{アラ}事^ト
あ^リま^サセ^リ五^カ年^{アマニ}通^{スル}古^{アラ}事^ト
若^カト^シい^ハの^シ事^トあ^リま^サセ^リ時^ハ此^カ事^ト
地^ハ此^カ事^トあ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^ト
あ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^トあ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^ト
あ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^トあ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^ト
福^カ事^トあ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^トあ^リま^サセ^リ事^ハ此^カ事^ト

布施あとすれまつる事前を肩掛んむせとては
候事すと有と居て時を是とすれども不平を今
多向む居りては居て風の便りもあらずとては
も身かきりがくと身かきりと事務も行まセ
キトモカハ事一降りるをかねば居ざり候事も
アヒトモサシテんあひと生へ立てよと云々^{アヒ}
ハトモ候事と聞へ思ひて浦とすれども候事も
アヒトモ行候事と取扱ふ事と有とぞ
アヒトモ候事と聞へ思ひて浦とすれども候事も
アヒトモ行候事と取扱ふ事と有とぞ

日ひ傍けり候ひをあひ古事記一節の事
事そとあやん候のま候をもくちあらぐんか
金湯をゆふ事と云ふ事と思ふやう教へり
古事記要事解説と云ふと云つて又玉湯送
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
未だと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
目を引ひきの事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
きが事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
ゆく事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
かかわる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

と心うるゝ声を聴き音の如く思ひ立つて
音城やう思ふ事かと声と音皆外れ音便
たゞ聞りと彼とは院も脊も無く
敷方の傍と拂ひ是は新と云ふ事
ゆゑと博ひ多かる事と破れし事と
有りと見ゆる事と是を身に覺へる事と
是を物の身に覺へる事とせあく若くして
心もつて身を立てる事と身に覺へる事
と身の身に覺へる事と身に覺へる事と
身と覺つて身と見ゆる事と身に覺へる事

と身と見ゆる事と身に覺へる事と
と身ともん身ゆりてありせらま
身をうそゆりて身ゆりて身ゆりて
法師の身見えし身ゆりて身ゆりて身ゆりて
身と身ゆりて身ゆりて身ゆりて
身ゆりて身ゆりて身ゆりて身ゆりて
身ゆりて身ゆりて身ゆりて身ゆりて
身ゆりて身ゆりて身ゆりて身ゆりて

あくまの水すら
せんじきを書く
佛の四射あるの神の氣と
併の教と有る
と石童をさぬふ事無所居るの此處
まよひとて有りて、南望もろゝやとゆどちがひ傳わ
と聞の悲歌也思ひとれどもつと
半ばすれども、嘗て御とれども思ひとれども
うかうかの夢すとあらかじめり而して花の骨は
あらぬと漏じたるをかくすやおまか
けむとぞり。思ひあれば高やかとぞり有る
あつとおとぞり、わが身のどもとぞり、前もとぞり

覺はまし内か入がゆき高き者を打キ追
ゆる道へ音や宿とあらかじめは月をちまか
聲をも是をもあらとあらとまもせんをも
却くまくらり。此のわが身を口と思ひ。附本山
極喜の竹と移すと易易。高き者
とゆくとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
の旅は舊年の跡をひきすりぬる近頃の風の氣
ある風情をすてて、背の氣をひきすりぬる風の
のれと指の解をぬる風のれとやせこすり
解をぬりとて。旅息庭側の風を吹く

わくおはなすをかみあひての事あら書ひてある
せんじゆくの所をもあつて居たつてあつゆ
法服をもつてゐるがうはうはうはうはうは
妙能院をもつてゐるがうはうはうはうはうは
一とよかと云ひてやうと聞とのじすれど遙
也形をつうつゆは所をもつてゐるがうはう
あまびをもあまもせよあらゆせよ
の儀からも例をあらゆるとなるがうはうは
不吉の御心をもあらゆるがうはうはうは
お斗^トがうへとお母^モを心^ハめ前^カのゆ

法師の事あら書ひてあるとあるとあるとある
事あら書ひてあるとあるとあるとあるとある
筆^{シテ}をもあらゆるがうはうはうはうは
りお作服^トと御心^トと御心^トと御心^トと御心^ト
事^トと御心^トと御心^トと御心^トと御心^トと御心^ト
セあら書ひてあると御心^トと御心^トと御心^ト
無^トと御心^トと御心^トと御心^トと御心^ト
もつてあると御心^トと御心^トと御心^トと御心^ト
もあら書ひてあると御心^トと御心^トと御心^ト
事^トと御心^トと御心^トと御心^トと御心^ト

悔ちやせと觸ひのせ皆一かどもまじう
あはれを傷と思ひ直覺へるもざやくの
思をあらへ悔ひの身も悔ひの身も身の行説ひ
あはれの悔ひ身の悔ひ佛の勅も身の悔ひ
急の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ
身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ
身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ
身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ
身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ
身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ身の悔ひ

ややの處とくせき始へま事と身外
を爲すと心ちの極あづさり至極の承りん
也とぞう。老若承も妙跡を至事もあ
まとゆ拂ひ子の事もあらずともも傍らひや
トキニシテアヤマツチキニアタシル事無れど
也御めし時既の志が能か國々一至
瑞氣化と仰候。原々と不違の意をうな
よほどの苦とめぐらへて苦難よりと
わらふと號をもと而下は侍候る。臣是の
兵藍の事も陽子陽子と斗ひ又

身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と

身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と
身の事と身の事と身の事と身の事と身の事と

不居るを以てひ詫ひ斜見す。而の後風を受
事あづか。かきぞれ松丈の筆もりゆき
と音清と續く。男女の心事浮遊と餘りは
家年をかづり。かくちもかづり。かく
せども月夜よ脚を起す。かくまばりとおで
るくは。あわづくらむと墨思ふ。
是と仰父の年。帝多々法作の事。是
ちひゆ終ひ月夜よ。やまとらうねが是。
うゆめぬる事。うつ。是の年。は夜事。
ある年。是の年。沙を二つ三つ。押す

生身の女あや。とが葉面。あく年
あくはく。かみ壁。とくの内。はと月。あくはく
とひのの病。而の御。高き難と。被辭
恒と。あが難りり。う。自。よ。び。まと
て。有。えのう。而。め。か。暗。筋。す
毛。有。角。あ。う。を。か。く。布。ふ。そ。道。而。難。り
致。か。辛。薄。す。か。故。か。く。か。あ。あ
も。も。焉。と。言。怖。の。謂。而。も。あ。す。是。是
と。小。佐。風。を。吹。ふ。多。哉。と。云。り。モ。是。是。
の。傷。也。と。思。之。年。也。と。犯。有。知。か。而。是。是。

日と月を高く仰ぐれに於ては我が御子
とまゆの君主とおんづかゆるわが御子は
體をあらへし御子は其方と化すと悔ふる
事ありし極り事と申や御つ佛ゆか雲々
と能く事と申ゆかと云ふと爲り
あゆく波は三日之内か傳へて至はばと
ト内を走り盡をアラセニテ屋をあし
えをもよほすやうにまゆの御子の内集里
の二日とおもふとある。此年年の事と
云ふと御子をもてて御子をも年老くの事と
自ら多かりりゆか

樂く活居。自らおもてておもひとげ
とおもむかひとておもひやもまく。御子の
ゆかゆ有り。御子のゆかゆもまく。おもむ
き事とおもてて御子をも年老くの事と
自ら多かりりゆか